園長通信～こころ～ №４４

全力応援

2024.6.7

テニスコートで、幼稚園の保護者と会った。その日は、福島支部中体連総合大会の日だった。園児のお姉さんが、ソフトテニスの選手として出場していた。私はというと、中学校の外部コーチとして来ていた。

ソフトテニス競技では、昨年度からクラブチームが参加できるようになり、今年度は一気に参加クラブが増えた。クラブチームの選手たちは、小学生のうちからソフトテニスの練習をし、大会にも出ている。中学校から始めた選手とは、技術、経験など差があるのはやむを得ないところである。

運わるく、団体戦の２回戦で、クラブチームとあたることになった。さて、どうするか。クラブチームよりも上回るものは何か。それは、部員数である。すなわち、応援力である。そのことを、部員たちに説明した。

すると、１年生と２年生が反応してくれた。すぐに、２年生がリーダーシップを発揮して、１年生に教えながら応援の練習をしてくれた。試合に出る３年生は、この応援に後押しされながら、相手に向かっていくだけである。

クラブチームとの試合が始まった。応援団は、最初からエンジン全開である。うれしかった。自然と、“全力応援団”という言葉が浮かんだ。試合はというと、こちらが気合を入れて、相手に向かっていくはずだった。しかし、相手の気合の方が勝っていた。試合は、劣勢である。それでも、応援団は、全力応援を続けてくれた。

試合には負けたが、その後の敗者研修試合を勝ち抜いて、次の県北大会に進めることになった。最後の試合が終わると、応援団からは、「先輩、おめでとうございます」の声がとんだ。最後の試合に勝った３年生に声をかけた。「どうだい。全力応援団に応援してもらって試合ができるって幸せなことだと思わない？」応援団には、「全力応援団の皆さん、ありがとうございました！」と大きな声をかけた。すると、拍手が起こった。応援団長にも声をかけた。「団長、ありがとう！」「声がかれました」「団長、合格です！」

全力応援団の１・２年生は、県北大会でも全力応援を披露してくれることだろう。今は、部活動の地域移行における過渡期にある。学校の部活動は、これから変わっていくことだろう。だが、学校の部活動だからこそできることが、まだまだあるように思う。

顧問の先生に伝えた。「全力応援、何だかうれしかったんだよね」その顧問の先生は、涙ぐんでいた。この先生は、私以上にすぐ泣く。いい先生である。この先生の熱意に応えるべく外部コーチを務めている。県北大会での全力応援でも、部員たちの“こころ”を感じたい。